Boko haram insurgency in northern Cameroon and Nigeria

（北カメルーンとナイジェリアにおけるボコハラムの反乱）

発表者：Ousmanou Adama（ウスマン・アダマ）博士
（マルア大学、上級講師／国立民族学博物館、客員フェロー）

要旨：
北カメルーンとナイジェリアは、ともに宗教的および民族的多様性が絶えまなく変化する、分割された地域を構成してきた。北カメルーンとナイジェリアは、経済面の課題と機会の狭隘化、（土地、テリトリー、水域などの）資源をめぐる紛争、民族集団間での政治権力や政治的地位へのアクセスの不平等、「周縁化されている」という感覚、伝統的リーダーシップの任命をめぐる課題、など多くの類似点を有する。これら類似点の全てが、個人と集団の関係に影響を与え、人々の間に深く根を下ろし続ける疑心暗鬼を増大させ、協調的関係の発展を阻害する結果になっている。民族的アイデンティティが宗教と重複するがために、それはしばしば、不幸なことであるが宗教に表現を求める。

ボコハラムの反乱は、カメルーン、チャド、そしてナイジェリアの安全保障、経済、環境、そして制度的統合に影響を及ぼしている。ボコハラムに対する闘いにおける軍事的そして政治的な目的は、当該地域における人道上の懸念に重きが置かれている。北カメルーンにおける「イスラームの過激化」という概念は、政府職員、メディア従事者、学者、そして安全保障に関わる政府職員の間でボコハラムによるテロリズムや暴力的な過激主義に関わる言説のなかで顕著に流通しているものだ。北部カメルーンにおける暴力的過激主義を進行させている最も顕著な要因は、過度な暴力的政策に対する効果的な対抗的政策が見いだせないことである。

先行研究は、ローカルなそして地域的な政治動態、経済的不平等と機会の欠如、環境劣化、そしてナイジェリア北部における宗教的イデオロギーを含む要因群の複雑な関係を示している。この研究の目的は、北部ナイジェリアにおいて過激化を許容するような、国内的不満あるいは国家への幻滅に関わる個人／集団レベルでのセルフ・アイデンティフィケーションのあり方、言い換えれば不平の原因の変化について分析することである。

北部ナイジェリアの住民は、ナイジェリア政府に不信を募らせる一方で、ボコハラムに対しては公的なシンパシーを抱き、新規加入などによる支持を与えている。いかにして、住民の不平の原因が、このことに正統性を与えているのか？これをまず理解したい。さらに比較アプローチをとることによって、北部カメルーンにおいて国内的な宗教に基づく過激化をエスカレートさせることを正当化する類似の主張があるが、それに対してどのように抗することができるのかを考察してみたい。なお、宗教が当該地域における暴力的過激主義の主要因ではないことを仮定する。宗教とエスニシティの多様性は、むしろ、カメルーンにおける多文化主義における最大の長所だからだ。

キーワード：ボコハラム、対抗的過激化、国家への幻滅、民衆による支持、北カメルーンとナイジェリア